ネイチャー・アンド・ソサエティ研究　第2巻

生き物文化の地理学

編　集

池谷和信

海青社

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究　第2巻

生き物文化の地理学

編　集

池谷和信

生き物と人との距離。非イスラム教徒の牧夫がブタの群れをつれて、ほぼイスラム教徒からなる街中を通り抜ける。（バングラデシュ、池谷和信 撮影）

海青社

「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」シリーズ（全５巻）

第１巻	自然と人間の環境史	宮本真二（岡山理科大学）、野中健一（立教大学）編
第２巻	生き物文化の地理学	池谷和信（国立民族学博物館）編
第３巻	身体と生存の文化生態	池口明子（横浜国立大学）、佐藤廉也（九州大学）編
第４巻	資源と生業の地理学	横山　智（名古屋大学）編
第５巻	自然の社会地理	淺野敏久（広島大学）、中島弘二（金沢大学）編

第２巻 執筆者（50音順、＊は編者）

池口 明子　（IKEGUCHI Akiko）……2章
横浜国立大学教育人間科学部 准教授

池谷 和信*　（IKEYA Kazunobu）……序章、14章
国立民族学博物館 教授、総合研究大学院大学 教授

石川 菜央　（ISHIKAWA Nao）……3章
広島大学総合博物館 客員研究員

齋藤 暖生　（SAITO Haruo）……5章
東京大学大学院農学生命科学研究科 助教

千代 勇一　（SENDAI Yuichi）……4章
上智大学イベロアメリカ研究所 準所員

高橋 春成　（TAKAHASHI Shunjo）……1章
奈良大学文学部 教授

橘　セツ　（TACHIBANA Setsu）……12章
神戸山手大学現代社会学部 教授

田和 正孝　（TAWA Masataka）……10章
関西学院大学文学部 教授

寺谷 亮司　（TERAYA Ryoji）……6章
愛媛大学地域創成研究センター 教授（センター長）

中井 信介　（NAKAI Shinsuke）……7章
大谷大学文学部 非常勤講師

野中 健一　（NONAKA Kenichi）……11章
立教大学文学部 教授

増野 高司　（MASUNO Takashi）……13章
国立民族学博物館 外来研究員

水野 一晴　（MIZUNO Kazuharu）……8章
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授

西村（宮村）春菜　（NISHIMURA（MIYAMURA）Haruna）……11章
三重厚生連鈴鹿中央総合病院 職員

山下 博由　（YAMASHITA Hiroyoshi）……2章
貝類多様性研究所 所長

柚洞 一央　（YUHORA Kazuhiro）……9章
室戸ジオパーク推進協議会 地理専門員

カバー（背景）／**玉本奈々**（TAMAMOTO Nana）　内面世界を布、色彩で表現する造形作家。主な受賞歴にフランス共和国名誉賞2003／新人賞2004／栄誉賞2005・6、個展に「玉本奈々の世界」（富山県相倉合掌造り集落、2007）、グループ展に「現代美術の展望VOCA展」（上野の森美術館、2004）、著書に「マスクの旅路」（文芸社、2009）などがある。富山県出身、大阪府在住。

シリーズ刊行趣旨

「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」は、自然災害への備えと対応、環境と開発、人口増加と食糧、持続的な資源利用、環境変化と生存などの世界が抱えているさまざまな問題の把握と解決に関心を寄せている。このためには、地理学が持っている自然と社会との総合性を追及することが不可欠であろう。これらの背景のもと、本シリーズの編者らが発起人となり2007年に日本地理学会に「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ」が設立された。2000年以降に、生き物や環境問題などを対象とする若手の地理学研究者が多くなったこともその機運となった。最近の地理学界では、対象とする地域や生業を超えて、人間－自然の相互関係をめぐる対話が活発になっている。グループでは発表や議論を通じてこうした話題や研究成果を蓄積してきた。

この成果をふまえ、本「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」シリーズは、地球上の各地に生きる人々が形成してきた人間－自然の相互関係を総合的に解明することを目的とし、『自然と人間の環境史』、『生き物文化の地理学』、『身体と生存の文化生態』、『資源と生業の地理学』、『自然の社会地理』の5巻で構成している。地理学を中心に、地域研究、人類学、社会学、農学、林学などを専門とする多分野の研究者が最新の知見をもとに執筆している。

本シリーズの刊行を契機に、従来の学問の枠を超え、人間－自然の相互関係を研究することの大切さと楽しさをアピールし、ネイチャー・アンド・ソサエティ研究をみなさんと共に発展させていくことができれば望外の喜びである。

「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」シリーズ編者一同
（編者を代表して：横山　智）

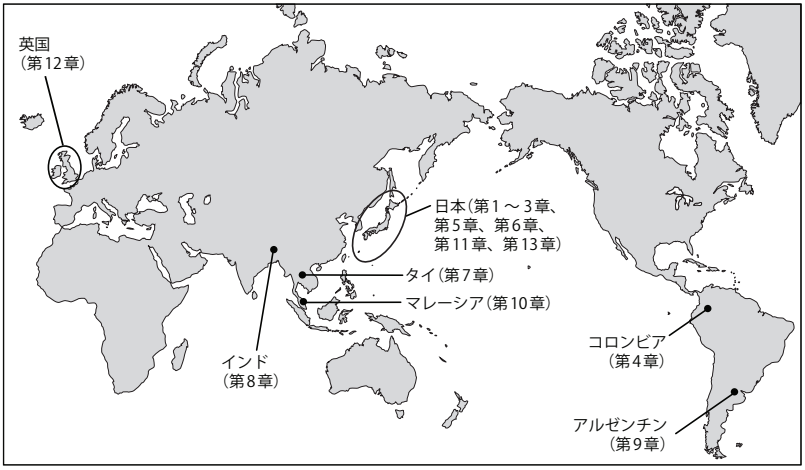
はじめに

現在、日本の新聞の紙面をみると、ウナギの枯渇、マグロの人工養殖、クラゲの異常繁殖、鳥インフルエンザの発生、イノシシによる農作物の害、アマゾンでの森林伐採、趣味の園芸、そして動物園・植物園・水族館の話題など、動物や植物などの生き物が登場しない日は少ないであろう。たとえ、私たちは文明生活を享受して日常生活においてこれら生き物に直接触れることは少なくても、現代社会では生き物と人との共存なしでは生きていけないことをよく示している。

本書は、地理学の視点から地球上に暮らす生き物と人とのかかわり方、つまり生き物文化を主題にしている。地理学は、日本や欧米のような先進国のみならず開発途上国の暮らしをも対象にしており、地球のすべての地表面における現象を対象にして研究を行ってきた。およそ200年以上前、ドイツの地理学者アレクサンダー・フォン・フンボルトは、フィールドワークによってアンデス高地を中心にすえて植物の垂直的な分布とその地理的要因となる気候条件とのかかわりを明らかにした。そして現在、アメリカの地理学者ジャレド・ダイアモンド(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)は、『銃・病原菌・鉄』などの著書を通して、地球環境史的な視野から人類の発展に関する歴史を展望している。

本書もまた、日本を中心としてアジア、ヨーロッパ、南アメリカなどに対象は及び、オセアニアと北アメリカとアフリカを除いた地球全体をおおっている(図参照)。その一方で、人の活動が関与しているすべての地球上の生き物を示しているわけではない。イノシシ、ウシ、ヤク、ミツバチ、犬、魚や貝などの動物、コカ、キノコ、桜などの植物の事例が中心になっている。各々の執筆者が、まさにこれはという生き物を1つ選び、生き物と人とのかかわり方を自らのフィールドワークを通して具体的に論述している。

本書は、3部から構成される。それぞれの章の詳細な内容は序章にゆだねるとして、第Ⅰ部は、生き物文化を把握するための「4つの視角」、第Ⅱ部は生き物・人関係の「地域諸相」、第Ⅲ部は「現代文明」と生き物・人関係のかかわり



（各章で言及する主なテーマ）

第Ⅰ部　生き物・人関係への地理学の視角
- 第1章　イノシシの分布からみた人獣交渉史
- 第2章　貝の利用からみた風土としての干潟
- 第3章　闘牛をめぐる人々の牛に対する認識
- 第4章　違法作物に翻弄される人々

第Ⅱ部　生き物・人関係の地域諸相
- 第5章　東北日本におけるキノコ採りの論理とその展開
- 第6章　酵母、麹菌、米を使った日本の酒造り
- 第7章　自然資源利用と豚飼育
- 第8章　インド、アッサムヒマラヤにおけるヤクの放牧利用と文化
- 第9章　養蜂業における花蜜資源利用

第Ⅲ部　現代文明と生き物・人関係
- 第10章　海と魚と人のかかわり
- 第11章　犬の飼育が作り出す社会空間のとらえ方とその活用
- 第12章　都市の観賞植物と庭園の変容
- 第13章　日本の花見に集まる人々
- 第14章　生き物文化の地理学の誕生

図　本書で取り上げたテーマと地域

方を示す。まず、第Ⅰ部では、生き物文化を把握するには実に多彩な視角がみられ、「生物」、「生態」、「社会」、「政治経済」をそれぞれ中心とした4つの視角が地理学の主な視角として提示される。読者は、地理学の視点を通してあまりにも多様な生き物と人とのつきあい方があることに気づかされるであろう。

次に、第Ⅱ部では、日本の東北地方からタイ、インド、アルゼンチンのような順番で、世界の国の生き物・人関係の地理が紹介される。ここでは、キノコ、

酵母、豚、ヤク、ミツバチからなるわずか5事例ではあるが、主に農村における生き物とのかかわりをテーマにしている。読者は、それぞれの関心に応じて新たなテーマや地域を加えることができるであろう。最後の第Ⅲ部は、主に西欧を中心として生まれた現代文明の世界へのグローバル化を正面にすえた論議である。環境思想、ペット、園芸植物などが、まさにそのよい例として示される。ここでの事例は、主に都市における娯楽活動を通した生き物と人とのかかわり方を対象にしている。

以上のように、読者は本書を読むことを通して、世界中の生き物と人との多様なかかわり方を知るなかで、生き物文化の領域には政治的な国境はあまり関係がない場合もあり、とりわけ、第Ⅱ部および第Ⅲ部から世界のなかでの日本の生き物文化の特性が何であるのかを考える機会になるであろう。同時に、生き物文化からみた世界のなかでの特定の地域の特性や地域間の共通性を理解できることになるであろう。

（池谷和信）

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻

生き物文化の地理学

目　　次

本文中で☞印を付した用語には巻末
「索引・用語解説」に解説を付した。

シリーズ刊行趣旨……1
はじめに……2

序章　現代の地球と生き物文化の諸相……（池谷和信）11
0.1　変わりつつある生き物と人との距離……11
0.2　地理学と「生き物文化」の研究……13
0.3　本書の構成……18

第Ⅰ部　生き物・人関係への地理学の視角……25

第1章　イノシシの分布からみた人獣交渉史：山から里、そして街へ
……（高橋春成）27
1.1　伊吹山に残る古代伝説……27
1.2　シシ垣の構築……31
1.3　里地周辺に生息するイノシシ……34
1.4　集落、住宅地、市街地に現れるイノシシ……43

第2章　貝の利用からみた風土としての干潟：生物地理学と文化地理学との対話……（山下博由・池口明子）49
2.1　はじめに……49
2.2　干潟の定義……52
2.3　東アジアの干潟貝類相の生物地理……62
2.4　干潟貝類の利用……70
2.5　生活のなかの貝類利用：沖縄島羽地内海の事例……79
2.6　まとめ……89

第3章　闘牛をめぐる人々の牛に対する認識：「楽しい」という感情の源を求めて……（石川菜央）97
3.1　はじめに……97
3.2　日本の闘牛……98
3.3　徳之島と闘牛……98

3.4　闘牛大会への出場……102
3.5　牛と関わる人々……109
3.6　闘牛における牛の捉え方……115
3.7　徳之島の闘牛における担い手の原動力……119

第４章　違法作物に翻弄される人々：コロンビアにおけるコカ栽培の実践とその政治性……（千代勇一）121
4.1　はじめに……121
4.2　コカの生態とアンデス地域におけるコカ……122
4.3　コカイン精製用のコカ栽培と国際社会および政府のコカ対策……125
4.4　ボリバル県南部におけるコカ栽培と社会変容……128
4.5　コカ対策とそれによる社会変容……134
4.6　おわりに……140

第Ⅱ部　生き物・人関係の地域諸相：日本から世界へ……143

第５章　東北日本におけるキノコ採りの論理とその展開：山里の生業から都市住民のレクリエーションまで……（齋藤暖生）145
5.1　はじめに……145
5.2　資源としてのキノコ……146
5.3　楽しみの連鎖：岩手県旧沢内村の事例から……151
5.4　キノコ採りの新展開：岩手県におけるアンケート調査から……159
5.5　まとめ：キノコへのまなざし……163

第６章　酵母、麹菌、米を使った日本の酒造り：日本酒の生産・流通・消費特性……（寺谷亮司）167
6.1　はじめに……167
6.2　日本酒の製法と原料……170
6.3　日本酒の生産・流通・消費……181
6.4　おわりに……189

第 7 章　自然資源利用と豚飼育：タイ北部の山地農村の事例から
（中井信介）193
7.1　はじめに……193
7.2　山地農村の暮らしと家畜飼育……195
7.3　自然資源を利用した豚の小規模飼育……199
7.4　山地農村における豚の小規模飼育の継続理由……206
7.5　まとめ……207

第 8 章　インド、アッサムヒマラヤにおけるヤクの放牧利用と文化……（水野一晴）211
8.1　はじめに……211
8.2　ヤクの生態……213
8.3　ヤクの放牧地と植生と牧畜民……217
8.4　牧畜民と農耕民の関係……221
8.5　ヤクの利用……224
8.6　ヤクの社会的、文化的重要性……227
8.7　まとめ……229

第 9 章　養蜂業における花蜜資源利用：アルゼンチンにおける日系人養蜂業者に見る自然・人間とのかかわり……（柚洞一央）231
9.1　はじめに……231
9.2　アルゼンチンの日系人養蜂業者と近年のハチミツ減産傾向……235
9.3　ハチミツ生産量減少の背景……242
9.4　蜜源環境変化への対応……249
9.5　おわりに……253

第Ⅲ部　現代文明と生き物・人関係……255

第 10 章　海と魚と人のかかわり：自然資源利用の実践と地理的知の行方
（田和正孝）257
10.1　はじめに……257
10.2　小規模漁業という暮らし……258

10.3　漁場を知る知恵……263
10.4　魚は姿をかえてゆく：生産から流通へ……268
10.5　持続的漁法の保存と復原にみる海と魚と人との関係……272
10.6　おわりに……275

第 11 章　犬の飼育が作り出す社会空間のとらえ方とその活用
……（西村（宮村）春菜・野中健一）277
11.1　はじめに……277
11.2　社会空間の中の犬……280
11.3　犬の散歩の事例……286
11.4　まとめ……296

第 12 章　都市の観賞植物と庭園の変容：近代英国における園芸とモラルの実践……（橘　セツ）301
12.1　はじめに……301
12.2　都市の園芸の先駆者：トマス・フェアチャイルドの思想と実践……302
12.3　有用性と美の追求：ジョン・クローディアス・ラウドンの思想と実践……304
12.4　庭園の野生：ウィリアム・ロビンソンの思想と実践……312
12.5　おわりに……318

第 13 章　日本の花見に集まる人々：大阪府における公園の空間利用の事例
……（増野高司）325
13.1　はじめに……325
13.2　大阪府の各地における公園管理と花見……328
13.3　元茨木川緑地（茨木市）の花見に集まる人々……336
13.4　花見の地域性……343

第 14 章　生き物文化の地理学の誕生：生き物資源利用と管理の思想
……（池谷和信）349
14.1　生き物文化へのまなざし……349

14.2 生き物文化の地理学の展開 351
14.3 3つの生き物文化論の展開 355
14.4 生き物の利用と管理の思想 361
14.5 生き物文化からみた地球の未来 364

索引・用語解説 368

序　章

現代の地球と生き物文化の諸相

生き物と人とのかかわり方の研究、つまり「生き物文化の研究」にはどのような研究の流れがみられるだろうか。そのうえで本書は、生き物文化の研究のなかで、どのような位置を占める本なのだろうか。本章では、生き物と人とのかかわり方を研究する意義について述べたあとに、地理学の視角から、生き物・人関係の研究への貢献のあり方を紹介する。

0.1　変わりつつある生き物と人との距離

現代の地球には、約71億を超える人々が暮らしている。同時に、地球上には、現在、170万種以上の生き物が知られており、まだ発見されていないものも少なくない。これらは、はるかに長い時間のなかで、数度の絶滅期を経てきたものである。そして現在は、再び「大量絶滅の時代」であるといわれる。サイやゾウやトラなどの動物、熱帯林を構成する多様な植物など、人間活動を主な要因として個体数を減少させたり絶滅に瀕したりしている生き物が少なくない（**写真0-1**）。私たちは、これらの生き物の絶滅を黙って見過ごしていてもよいのであろうか。

写真0-1　コククジラの解体（ロシアのベーリング海峡）
（筆者撮影）

近代文明は、生き物と人との距離を拡大した。私たちは、

このプレビューでは表示されない頁があります。

第Ⅰ部

生き物・人関係への地理学の視角

生き物という環境。ニホンザルが山から降りてきて民家を訪問。（宮城県仙台市、伊澤紘生 撮影）

このプレビューでは表示されない頁があります。

第1章

イノシシの分布からみた人獣交渉史

山から里、そして街へ

1.1　伊吹山に残る古代伝説

1.1.1　白イノシシと伊吹山の神

滋賀県の最高峰である伊吹山（いぶきやま）（**図 1-1**）には、ヤマトタケルと白イノシシの伝説がある。今では合併して米原（まいばら）市になったが、旧伊吹町の春照（すいじょう）に、古代伝説にちなんだモニュメントもある（**写真 1-1**）。

ヤマトタケルと白イノシシの古代伝説は、712 年に献上された日本最古の歴史書とされる古事記に載っている。この中でヤマトタケルは、景行天皇を父とし、父の命を受けて、九州のクマソタケル、出雲のイズモタケルなどを征し、各地の荒ぶる神々を平定していく。その途上で、伊吹山の神を討ちに出かけ、白イノシシの姿をした伊吹山の神と出会う。古事記の記述を紹介した旧伊吹町の町史には次のように書かれている（伊吹町史編さん委員会 1997）。

図 1-1　伊吹山地周辺

G：GPS 調査地、S：シシ垣。（国土地理院発行 1/20 万地勢図「岐阜」平成 17 年発行、70％）

このプレビューでは表示されない頁があります。

第2章

貝の利用からみた風土としての干潟

生物地理学と文化地理学との対話

2.1 はじめに

干潟というと、皆さんはどんな場所を思い浮かべるだろうか。シギ・チドリが夕焼けを背に、餌を探しているのどかな風景。カニやハゼたちが遊んでいる静けさ、風の音を聞いているような葦原、シチメンソウの紅葉。あるいは現代では、貝より人の方が多いような潮干狩り場であるかもしれない。

干潟と人類の関わりは古く、日本においても、縄文時代の遺跡から多くの干潟貝類の利用が認められる(酒詰 1984)。712 年に成立した古事記には次のような記述がある。大穴牟遅(おおあなむぢ)の神(大国主の神)は火傷を負って死んでしまうが、神産巣日(かむむすひ)の神は蚶貝比売(きさがひひめ)と蛤貝比売(うむがひひめ)を遣わし、「蚶貝比売きさげ集めて、蛤貝比売待ち承けて、母の乳汁と塗りしかば、麗しき壮夫に成りて、出で遊行びき」(西宮 1995)、すなわち「赤貝姫は貝殻を削り集めて粉とし、蛤姫がこれを母乳と共に溶いて塗ると、大穴牟遅の神は麗しい青年となって復活した」とある。つまり、この時代にはアカガイ(これはアカガイ、サルボウなどの総称であると考えられる:以下、特別な場合を除いて本文での学名表記を省略する)とハマグリという干潟貝類が神格化されるほど、日本人の生活に密着した存在であったことがうかがわれる。江戸時代には、潮干狩りは庶民の大きな娯楽であり、「はまぐりをつぶてになげる汐干かた」など多くの川柳や俳句が詠まれ、葛飾北斎や歌川広重などの浮世絵も残されている(原田 2004)。このように日本人と干潟には親しいつながりがあったが、高度経済成長期の中で、多くの干潟が埋め立てられ、また汚染によって貝類の減少も起こっていく。さらに流通の発達によって、アサリ・ハマグリなどは、潮干狩りで採るものではなく、購入するものに変化していった。東京湾のアオギス釣りが昭和 40 年前後に消滅したこと

このプレビューでは表示されない頁があります。

第3章

闘牛をめぐる人々の牛に対する認識

「楽しい」という感情の源を求めて

3.1　はじめに

「もし徳之島に闘牛がなかったら、今、自分はこの島には住んでいないと思う。これから先50歳になっても、60歳になっても、杖つきながらでも仲間と闘牛で盛り上がっているはず。」

私はフィールドワークにおいて、こうした声を幾度も聞いた。

本章では、徳之島における闘牛に様々な立場で関わる人々の活動に着目する。そして、何が彼らを闘牛に駆り立てるのかを解明することを目的とする。闘牛の担い手に「なぜ闘牛と関わるのか」と問えば「楽しいから」とか「牛が好きだから」といったシンプルな答えが返ってくる。担い手たちの感動や個人的な体験は、伝統行事の存続の仕組みという概念からはしばしばこぼれ落ちてしまう。しかし、実際に担い手と接していると、闘牛の現場を動かしているのは、担い手たちの「楽しい」という感情なのだと感じる。

著者はこれまで、日本における闘牛の存続の仕組みを、担い手の社会関係に着目して追究してきた(石川 2012、2008)。現代では、多くの伝統行事が経済成長などの社会の変化によって生業における意義を失い、衰退しつつある。中でも闘牛は、担い手にとって続けていくことの負担が大きい行事である。牛の購入や飼育、闘牛にまつわる交際費などは、基本的に担い手の自己負担であるし、牛の飼育者は日常生活において大きな制約を受けるからである。それでも、闘牛は全国6地域で盛んに行われている(**図3-1**)。闘牛を続けるための強い動機はどこから来るのであろうか。

本章では開催地の中でも特に、闘牛が男女に関わりなく幅広い年代の人々に

このプレビューでは表示されない頁があります。

第4章

違法作物に翻弄される人々

コロンビアにおけるコカ栽培の実践とその政治性

4.1 はじめに

南米原産の植物コカは、人間の様々な欲望に応じて、聖なる植物から嗜好品、そして麻薬コカインの原料へと姿を変えてきた(Cabieses 2007: 17–20; Léons and Sanabria 1997: 3–4; Morales 1989: 13–24)。1961年採択の「麻薬に関する単一条約」以降は、麻薬原料植物として国際的な規制対象となった。今日、コカが有する違法性は、麻薬問題の深刻化という現代社会の文脈によって付与されたものであり、コカ自体に本質的に備わっているものでないことはいうまでもない。しかし、違法性が付されたことによってコカは政治的な作物へと変化した。この政治性は、非合法経済や非合法組織との結びつきによるローカル社会の変容、国際的な薬物規制や国際政治の影響、そしてこれらを背景とした国家とローカル社会の関係性の変化などに見いだすことができる。

コロンビアは、2009年に世界の年間コカイン総生産量の51パーセントにあたる430トンの生産能力があったと推定され(UNODC 2009: 64–66)、その原料であるコカの栽培面積も81,000ヘクタールと世界の総栽培面積の約半分を占めている(UNODC Colombia 2009: 10–11)。しかしながら、コロンビアにはコカ栽培の伝統がほとんどなく、1990年代後半にコカイン用の栽培が急増して世界最大のコカインおよびコカの生産国となった。この状況を受け、コカインの最大の消費国である米国はコロンビアに対して集中的に麻薬対策支援を実施してきたのである。コロンビアの麻薬問題は、コカを巡ってローカル社会、政府、米国など多様な社会的行為者が相互に作用するプロセスであるともいえよう。

そこで本章は、コロンビアにおけるコカの栽培と政府の対策を事例として、多様な社会的行為者の相互作用という視座からコカとコカ対策の政治性を議論

このプレビューでは表示されない頁があります。

第Ⅱ部

生き物・人関係の地域諸相
日本から世界へ

ニホンミツバチの養蜂に使用される巣箱(ハチドウ)の景観。(長崎県対馬市、池谷和信 撮影)

このプレビューでは表示されない頁があります。

第5章

東北日本におけるキノコ採りの論理とその展開

山里の生業から都市住民のレクリエーションまで

5.1　はじめに

人とキノコの関係を研究する学問、すなわち民族菌類学ethnomycologyの草分けと言われるR・ゴードン・ワッソン(R. Gordon Wasson, 1898–1986)は、世界には「キノコ好き(mycophillia)」の文化と「キノコ嫌い(mycophobia)」の文化があることを見出し(Wasson and Wasson 1957)、以後、後続の研究者たちもこの2種類の文化様式の存在を興味深い問題として取り上げてきた(**写真5–1**)。この分類では、ロシアを筆頭として、日本もまた前者の文化群の代表的なものとして数え上げられてきた。なかでも、東北地方の人々はキノコ好きで、多種多様のキノコを山から採取し食用としていることは、しばしば言及されてきたことである(四手井1979; 横山1992; 北村1995)。

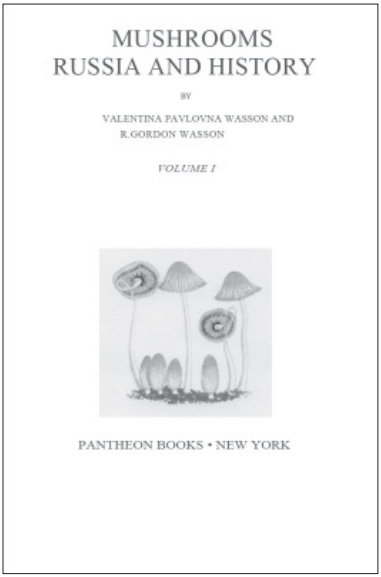


写真5–1　民族菌類学の草分けとされるワッソンの著書の表紙

ところが、キノコ利用の一般的な事情は置き去りにされ、キノコの特殊な利用についての報告が多くなされてきた。キノコの不可解さにとらわれた人々の精神的世界や、キノコが持つ様々な毒、特にも精神昂揚をもたらすキノコに関する研究、または、経済的価値に着目した民族薬学的研究や特定のキノコ流通に関連する研究に多くの関心が払われてきたので

このプレビューでは表示されない頁があります。

第6章

酵母、麹菌、米を使った日本の酒造り

日本酒の生産・流通・消費特性

6.1 はじめに

6.1.1 酒の存立条件

酒は、エチルアルコール(C_2H_5OH)を含んだ致酔飲料である。わが国では、酒税法によって、アルコール分1度以上の飲料が酒と定義される。世界各地には、地域の風土を反映して、原料や製法の異なる様々な酒が存在する(**表6-1**)。

表6-1 世界の酒類区分

原料			糖化方法	醸造酒	蒸留酒		混成酒	
					単式蒸留	連続式蒸留	賦香	賦香・加糖
糖質原料	果物	ブドウ		ワイン	ブランデー	グラッパ	ドライベルモット	グラン・マルニエ
		リンゴ		シードル	カルヴァドス			
		サクランボ			キルシュワッサー			マラスキーノ
		プラム			スリボビッツ			
	その他	ハチミツ		ミード				
		サトウキビ(廃糖蜜)			ダーク・ラム	ホワイト・ラム		
		〃 (果汁)			ピンガ			
		〃 (黒糖)			黒糖焼酎			
		乳		馬乳酒	アルヒ	アルズ		
		ヤシ(樹液)		ヤシ酒	アラック			
		リュウゼツラン		プルケ	テキーラ			
デンプン質原料	穀物	うるち米	麹	日本酒	米焼酎			屠蘇酒
		もち米	麹	黄酒，法酒				
		大麦	麦芽	ビール	モルト・ウィスキー	コルン	シュタインヘガー	ドランブイ
		トウモロコシ	唾液	チチャ				
		〃	麦芽		バーボンウィスキー	グレーンウィスキー	ジン	
		シコクビエ	麹	チャン	ロキシ			
		コウリャン	麹		白酒			
	他	サツマイモ	麹		イモ焼酎			
		ジャガイモ	麦芽				アクアビット	

資料：Takara 酒生活文化研究所(2000)などより作成。

このプレビューでは表示されない頁があります。

第7章

自然資源利用と豚飼育

タイ北部の山地農村の事例から

7.1 はじめに

現在の日本において家畜を飼うということは、ほぼ近代的な畜産を行うということに等しい。農家もしくは企業など、生産主体の規模の大小はさまざまであろうが、家畜を飼う目的は、ほぼ販売による経済的利益にある。そして、このために牛、豚、鶏などの家畜を大規模かつ非常に高い生産効率を追求する中で飼育している(*cf.* 大呂 2007; 淡野 2007; 後藤 2003)。このような日本の畜産においては、経済的利益が十分確保できない場合は、通常、家畜を飼うことをやめる。もちろん、経済的利益や生産効率を追求せず、趣味的に家畜を飼う人々もいるが、これらはペットとしての飼育と分類するのが妥当だろう。

このような日本の畜産においては、その家畜の餌も産業的に生産されるものが大勢を占める。しかも、その餌が外国からの輸入に多くを拠っていることはよく知られている(*cf.* 早川 1986)。もちろん、産業的に生産される家畜の餌も、自然に由来する栽培植物の産物を含んでいる。しかし、これらは、複雑な輸送と加工を経て餌として利用されている。むしろ現在の日本においては、家畜の餌についてのゆきすぎた効率に基づく生産への反省から、近年、人の食品残渣を利用した餌の開発が、エコフィード研究として再編されて進められている(泉谷 2010)。

世界の家畜飼育の状況をみると、日本のような近代的畜産を行う国や地域は増えつつある。これはもちろん、FAO(国連食料農業機関)をはじめとする国際支援や、各国における国・地域レベルの開発プロジェクト、または農家自身の生産効率向上への努力の結果であろう。本章で事例としてとりあげる東南アジア大陸部のタイ、ラオスをはじめとする国々でも程度の差はあれ、変化の方向

このプレビューでは表示されない頁があります。

第8章

インド、アッサムヒマラヤにおける ヤクの放牧利用と文化

8.1 はじめに

インドのアルナーチャル・プラデーシュ州は、ブータンとチベットに囲まれた山岳地域である(**図8-1**)。この領土の帰属をめぐって、長らくインドと中国の間で国境紛争が生じ、1990年代まで外国人の入域が禁止されていたため、ベールに包まれた地域となっている。アルナーチャル・プラデーシュ州の北西部にはモンパ民族が住んでいる(**図8-2**、**表8-1**)。彼らはチベット系民族であり、

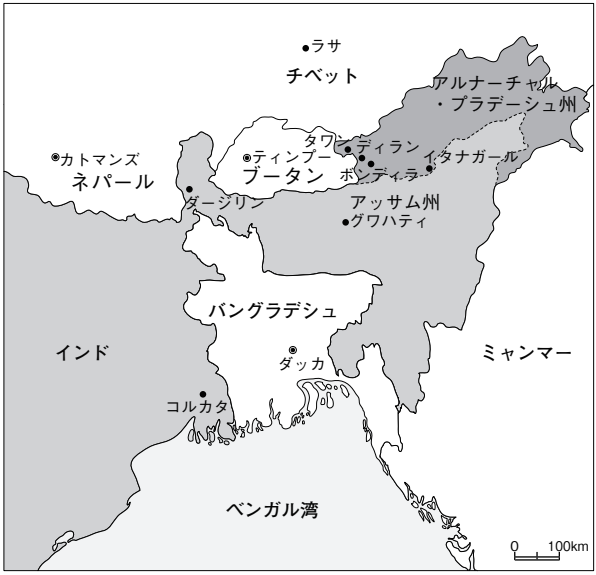


図8-1 インド、アルナーチャル・プラデーシュ州の位置図

このプレビューでは表示されない頁があります。

第9章

養蜂業における花蜜資源利用

アルゼンチンにおける日系人養蜂業者に見る自然・人間とのかかわり

9.1 はじめに

9.1.1 自然・人間の営みを利用して成立する養蜂業

「今年は花がたくさん咲いて、ミツバチも盛んに飛んでいたのにあまりハチミツが採れなかった。今年は蜜がふいていないんだ。こんな年はいままで経験したことがないな。」

「花の時期の後半は、寒さと雨でミツバチがあまり飛ばなかったし、全体としてハチミツの収量もよくなかった。まぁこんな年もあるよ。来年に期待だな。」

ハチ屋さん(私は養蜂家[1)]のことを親しみを込めてこう呼んでいる)がミツバチのことを語るまなざしは、どこか自然に対する謙虚な気持ちがにじみ出ている。そして、まるで自分がミツバチになって飛び回っているかのように、普通の人間では認識できないような周囲の自然環境の変化を敏感に把握している。その感性は、まるでミツバチが自分の体の一部になっているかのようだ。

筆者はこれまで、日本各地およびアルゼンチンにおいてたくさんの養蜂家に聞き取り調査をしてきた。これまでに関わった養蜂家は150名以上になるだろうか。いずれの養蜂家に共通してみられたのは、自然環境の変化を敏感に把握する感覚の鋭さと、人に対する思いやりの心を持った人が多いということである。

1) 本章では、ミツバチを飼育している人全体(専業か趣味かを問わない)を「養蜂家」とする。ただし、養蜂を専業としている人だけを特に示す場合には「養蜂業者」とする。

このプレビューでは表示されない頁があります。

第Ⅲ部

現代文明と生き物・人関係

さくら祭りを楽しむ人びとの場所。小集団によって占有された利用状況を示す。
（東京・上野公園、増野高司 撮影）

このプレビューでは表示されない頁があります。

第10章

海と魚と人のかかわり

自然資源利用の実践と地理的知の行方

10.1　はじめに

近年、自然は誰のものであるかを問うたり、☞共有財産（コモンズ）としての自然を議論したりするなど、人間と環境をめぐる研究が隆盛となっている（秋道編 1999; 秋道 2004、2010）。これに合わせるように、「人と動物の関係学」や「生き物文化誌学」といった新たな研究分野が立ち上がり、それらに関係する学会が、研究者のみならず、実務家や行政関係者、一般市民を巻き込んで組織されるようになってきた。魚に関するトピックも、このような生物と人をめぐる動きの中に位置づけられることは明白である。魚を漁業の対象として第一次産業の中においてとらえるだけではなく、その延長線上にある調理の問題や魚食普及活動、さらには魚とそれを取り巻く環境の保全をめぐる運動や町おこしなど、様々な実践についても目が向けられている。また、魚を楽しんだり、魚に「癒し」を求めたりするレジャーや趣味も盛んである。ペットブームにみられる観賞魚の飼育、水族館めぐり、ホエールウォッチング、シュノーケリングやスキューバダイビングによる海洋生物の観察など☞生態系サービスも、本章のキーワードである「海／魚／人」に大いに関わっている。

はたして海と魚と人は、これまでどのような関係をつくりあげてきたのだろうか。これについて語るためには、海洋学的知識と魚に対する生物生態学的知識とが必要であり、漁業資源論や漁業経済学、さらには海洋人類学や漁業民俗学、社会学や政策学などにも精通していなければならない。人が海や魚といかにして付き合ってきたのかを、系譜論的に考える文化史的な知識も必要である。私はそれらのいずれの専門的知識も持ち合わせていない。「海と魚と人の関係学」のような体系を確立してゆく時には、研究の回顧と展望が適任の専門家に

このプレビューでは表示されない頁があります。

第11章

犬の飼育が作り出す社会空間のとらえ方とその活用

11.1 はじめに

犬は人がもっとも古くに家畜化した動物といわれ、18,000年前のアラスカの遺跡で犬の遺骨が見つかっている（埴原 2003）ようにその歴史は古く、その後世界各地でさまざまな品種が作り出され、役畜用として、愛玩用として、あるいは食用として人に身近な動物としてなじみ深く現在に至っている。役畜としては、牧羊、警察、軍用、救助、盲導・聴導等の介助、闘犬競技、橇や童話『フランダースの犬』にみられるような荷車、日本の四国における森林鉄道でのトロッコ（名取 1996）等の牽引など、その能力が活かされたり、より特化させられたりしつつ人の生活の実に多方面にわたって役立ってきた。犬の姿形は数多くの美術・文学作品のモチーフになり（宮内庁三の丸尚蔵館 2003; 利倉 2003; 今橋 2004）、供儀にも使われている（清水 2005）。さらには、コンパニオンアニマルとして、人の仲間や家族の一員ともなっている。このような社会のさまざまな側面で、人と直接的に深く関わり合うことの多い犬は、人間生活の形成に影響をあたえており、逆に犬の存在性を社会・環境の中でとらえることで、人間社会の特徴を浮き彫りにすることもできよう。また、犬は歴史の象徴として、政治や人々の生活感をも物語る（スキャブランド 2009）。

こららの点からわかるように犬は人にきわめて身近な存在であるため、動物と人との関わりあいに関する地理学的研究の題材としても興味深い。フィロー（C. Philo）とウィルバート（C. Wilbert）は、動物を環境の一つとしてとらえ人との関係性に注目する新しい生物地理学を提唱した（Philo and Wilbert eds. 2000）。ここでは動物は環境要素といいながら、静的・固定的なものではなく、意志をもって自ら動く存在であることが着目される。そしてその動きが人との関係に

このプレビューでは表示されない頁があります。

第12章

都市の観賞植物と庭園の変容

近代英国における園芸とモラルの実践

12.1　はじめに

都市に生活する多くの人びとは何らかのしかたで植物とかかわっている。自宅に庭をつくって植物を植える。庭をつくる余裕がなければ、鉢植えの草花を玄関の周りの戸外や窓辺に飾り、室内では花瓶に花を活ける。あるいは公園や広場などの公共のオープンスペースの緑の草花があふれる場所で都会の喧噪からのがれる。

これらの行為は都市の住民がそれぞれ好き勝手にしているようにみえる。また、ほとんどの人はたんに草花が好きだからという理由で植物を観賞する。しかし観賞の対象となる植物の選定や都市空間における庭園のデザインには観賞植物と人間の関係の歴史、すなわち園芸の歴史がかくされている。いいかえれば現代における都市のガーデニングや造園は園芸理論家たちの思想と実践の延長線上に位置づけられる。

本章では、18 世紀から 20 世紀にかけて英国の都市ロンドンで観賞植物が選定され庭園が形成されてゆく過程の一側面を 3 人の園芸理論家、トマス・フェアチャイルド(Thomas Fairchild, 1667–1729)、ジョン・クローディアス・ラウドン(John Claudius Loudon, 1783–1843)、ウィリアム・ロビンソン(William Robinson, 1838–1935)らの思想と実践の考察からあきらかにする。

これら 3 人の園芸理論家たちが生きたロンドンはかならずしもよい環境ではなかった。19 世紀のロンドンでは住民が暖房のために使用する石炭燃料の燃焼からでる煤煙やスモッグなどの大気汚染、テムズ川の水質汚染、都市に住む工場労働者や港湾労働者の人口過密やかれらの貧困による劣悪な住環境が社会問題視された(メイヒュー 2009: 1992)。これに対して労働者の健康的な生活を

このプレビューでは表示されない頁があります。

第13章

日本の花見に集まる人々

大阪府における公園の空間利用の事例

13.1　はじめに

都市やその近郊に位置する公園は、都市化が進む日本において、地域住民が動植物とのふれあいを楽しむ場所のひとつとなっている。例えば、公園を訪れる野鳥や昆虫、そして四季折々に咲きほこる花々など、公園では多様な動植物とふれあうことができる。そのなかでも、桜は特別である。桜の花が見頃の時期には公園が花見客であふれかえる。

花見という言葉は、広義には花の種類に限らず花を愛でる行為全般を指す言葉である。そのいっぽうで、一般に花見といえば、桜を対象とした花見を指すことが多い。このような桜を対象とした花見は、正月やお盆とならぶ日本の年中行事のひとつである（井上・サントリー 1993）。これまでに、狭義の花見の定義として、群桜（群れ咲く桜）、飲食（飲食を伴うこと）そして群集（大勢の人出があること）という３つの要素が備わったものとする定義（白幡 2000: 14）が提唱されている。これら３つの要素が組み合わさった花見は、世界にはみられない日本独特の行事とされる（白幡 2000: 17–18）。

ここで花見のルーツについて見ると、貴族の花見（＝「宴」）と農民の花見（「春山行き」）という２つのルーツがあるという（白幡 2010: 181）。平安時代の貴族たちは、宮中にとどまらず公卿たちの山荘などでも花の宴を開き、酒肴を楽しみながら和歌を詠んだという（田中 2003: 29）。いっぽうで、農民は、桜の咲くころに酒や食べ物を持って付近の小高い丘や山に登り、花のもとで飲み食いをして１日を過ごす「春山入り」などと呼ぶ行事をおこなっていた。「春山入り」の行事は、田の神を里に招く行事であると同時に、花の咲き具合によって、稲の出来具合を占う農事農耕儀礼でもあった（白幡 2010: 181）。これら貴族的な文

このプレビューでは表示されない頁があります。

第14章

生き物文化の地理学の誕生

生き物資源利用と管理の思想

14.1　生き物文化へのまなざし

私たちの身近に存在する新聞やテレビの報道で、生き物に関する記事やニュースが紹介されない日はないであろう。ウナギなどの食品の偽装、焼肉店での生レバーの品質、鳥インフルエンザの感染による鶏の大量死、トキやコウノトリやイリオモテヤマネコなどの絶滅危惧種の保護(菊地 2013)、森や林や里山の保全など(池谷 2011)、いずれも生き物と私たちとの関わり方に関する話題は数多い。そして、これら問題の先には地球全体の生物多様性の保全を視野におきながら、私たち人類と生き物との共生のあり方が問われている。

さて、ここでは生き物文化への私たちのまなざしについて紹介しよう[1)]。これには、2つの見方がある。ひとつは、生物たちの生き方は、それぞれの生物の文化であるという立場である(日高 2008)。これによると、単細胞文化や肛門の文化などアメーバから人間まですべての生物に文化が存在して、人間の文化はとくにすぐれているわけでもなく、さまざまな動物文化のなかの一つのパターンにすぎないことになる。この考え方は、現代社会で広く浸透している人間中心の世界観のあり方に警告を鳴らすことにつながるであろう。

もう一つは、人間による生き物に対する豊かな知恵と技術、芸術、信仰の総体を文化(秋道 2003)や風土(高橋 2010)と呼ぶ立場である。これらは、文化人類学(民族学)や地理学における文化や風土の概念を生き物に導入することで、人間と他の生き物とのかかわり方に焦点をおいたものである。つまり、両者の相互作用によって生き物文化が生まれたとする立場である。例えば、国立民族学

1)　本章の内容は、その前半部では池谷(2008)を骨子としながらも、全体として大幅な加筆・修正を加えている。

このプレビューでは表示されない頁があります。

索引・用語解説

ア　行

空き地／294
アルコール発酵／169
アルナーチャル・プラデーシュ／211
アルファルファ／246

生き物資源の利用と管理／361, 362
生き物・人関係／22　生き物と人はさまざまな関係をもってきた。たとえば、あるものは人の生活を脅かす存在となり、あるものは狩猟・漁労・採集、栽培・家畜化などの対象となってきた。そこには、時代や地域などの特徴がみられる。自然分野と人文分野を融合した学問体系をもつ地理学において、生き物と人の関係は主要なテーマの１つであり、多様なアプローチが期待される。［高橋］
生き物文化／351　生き物と人は、多様なかかわり方を持っているが、それらが統合されたもの。例えば、鶏という生き物は、世界的に広く肉や卵が利用されてきたが、骨は占いに羽はダンサーの飾りに使われることがある。また、供儀する対象として儀礼の際に欠かせない地域もある。［池谷］
生き物文化論／353
諫早干拓／54
石干見／272
移動養蜂／232　ミツバチの飼育場所を移動させながら行う養蜂のこと。転飼（てんし）養蜂とも言う。移動の目的としては、ハチミツの収量を増やすために花を求めるもの、夏の避暑や冬の避寒、避雪など、ミツバチにとっての生育環境を求めるものなどがある。移動コストに見合った効果（ハチミツの収量増加やミツバチの増群など）が見込まれる場合に行われる。移動を伴わず通年で同じ場所で飼育を行うことは、定地養蜂、定飼（ていし）養蜂と言う。［柚洞］
移入植物／302
犬の散歩／334
猪飢渇／36
飲食風土／189
飲食文化／188

牛主／98

猿害／297
園芸植物／360
園芸理論家／302
塩生湿地／57　塩生植物（高い耐塩性を持った種子植物）が繁茂する湿地。海岸・河口域の葦原、マングローブも塩生湿地に含まれる。［山下］

大阪城公園駅／332
オープン・アクセス／158
奥山／33
おすそわけ／156
温室／308

カ　行

介助犬／283
海鮮料理ブーム／271
海草藻場／61　かいそうもば、うみくさもば、Seagrass bed。海草が繁茂する場所。海草は海生の種子植物（単子葉類）で、アマモ類・ウミヒルモ類などがある。海藻と区別するため、近年は「うみくさ」と発音するのが一般的である。［山下］
回遊性魚種／261　海域を広く回遊し生活する魚種をいう。定着性の沿岸性魚種と対をなす。多くは群れをなして行動する。種類によって行動域や回遊のパターンも様々である。たとえば、索餌回遊、産卵回遊などの分類がある。行動域の広いカツオ、マグロ、カジキなどを特に高度回遊性魚種とも呼ぶ。［田和］

このプレビューでは表示されない頁があります。

● **編　者**　①現職、②学位、③専門分野・研究対象、④著書・論文

池谷和信（IKEYA Kazunobu）

①国立民族学博物館 教授、総合研究大学院大学 教授、②博士（理学）、③地理学、人類学、生き物文化誌学、④『山菜採りの社会誌』（単著、東北大学出版会、2003年）、『現代の牧畜民』（単著、古今書院、2006年）、『野生と環境』（編著、岩波書店、2008年）、『地球環境史からの問い』（編著、岩波書店、2009年）、『ボツワナを知るための52章』（編著、明石書店、2012年）、『わたしたちのくらしと家畜 全2巻』（単著、童心社、2013年）ほか。

Nature and Society Research Series, vol. 2

The Geography of Human Relationships with Plants and Animals

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻

生き物文化の地理学

発 行 日 ―――― 2013年 9 月 30 日　初版第1刷

定　　価 ―――― カバーに表示してあります

編　　者 ―――― 池 谷 和 信

発 行 者 ―――― 宮 内　　久

海青社 Kaiseisha Press

〒520-0112　大津市日吉台2丁目16-4

Tel.（077）577-2677　Fax（077）577-2688

http://www.kaiseisha-press.ne.jp

郵便振替　01090-1-17991

● Copyright © 2013 ● ISBN978-4-86099-272-9 C3336 ● Printed in JAPAN

● 乱丁落丁はお取り替えいたします

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-86099-921-6（PDF）